

# 五代地蔵

昔々、川内川河口の港に着いた船からひとりのお坊さんが降り立ちました。さほど年寄りにも見えないのに、杖にすがり、やつれた青白い顔をしていました。お坊さんはあたりをずっと見回して、「ああ、懐かしいなあ。あちらの方角が我が村だ。もう少しで戻る」とつぶやき、「それにしても残念だ。病気でさえなければもつと修行をしたのに」と涙をこぼしました。

お坊さんはここよりはるか東南の方向、冠岳の麓にある百次で生まれ育ったのでした。若くして仏門に入り、奥義を究めようと京に上りました。長い年月をかけて修行を積み、それなりの地位も得ていたのですが、健康をそこねて、故郷へ帰るところだったのです。

やがて、お坊さんは、気を取り直し、故郷をめざしてゆつくりと歩き始めました。それから数日後のこと、お坊さんは五代の村はずれで倒れてしまいました。通りがかりの村人たちが介抱しましたが、息も絶え絶えでした。それでも、力をふ



りしぼつて、ここまで来た訳を話し、「どうか、故郷を拜めるような所に、埋めてください」と言つて、亡くなりました。

村人たちは、志半ばで病に倒れたお坊さんを哀れに思い、故郷が見えなくても見晴らしがよければと、高台にある羽田墓地に葬り、僧侶姿を刻んだ墓碑を建てたそうです。

それから数百年が経ち、それは五代地蔵、羽田地蔵と呼ばれるようになりました。彫られた僧侶の姿も、背面の銘もすっかり摩滅していますが、長年にわたって地区の人々に大切に守られてきました。壊れたところは補修され、雨よけの屋根もつけられています。周辺は常にきれいに掃き清められ、花の絶えることがありません。

そうして、いつの頃からか、このお地蔵様は、歯の痛みをとめてくださる、あるいはまた、いろいろな病気を治してくださると信じられるようになりました。最近では安産祈願に訪れる人も多いようです。



(原話「川内地方を中心とする郷土史と伝説」)

文／有馬英子 絵／二石綱夫